
ガンバライドバトル ライドマスターズ ～Ver.LIGHTNING～

柳雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガンバライドバトル ライドマスターズ Ver. LIGHT
NING

【Nコード】

N5559M

【作者名】

柳雨

【あらすじ】

カードとなったヒーロー『仮面ライダー』が活躍するカードゲーム『ガンバライド』…だが、彼らの戦いの舞台はゲーム画面だけにとどまらず…？ガンバライドと初めて出会った少女の物語が今、スタートする

(前書き)

※本作はBONBONCOMICS『ガンバライドバトル
マスターズ』という漫画の設定を使った二次創作小説です
ライド

荒唐無稽な展開有りですので苦手な方は注意してください

—仮面ライダーバトル『ガンバライド』。

—データカードとなったヒーロー『仮面ライダー』をゲーム画面内に呼び出し、2対2でバトルを行う夢のカードゲーム。

—1枚のカードには一人のライダーデータがあり、その種類・枚数・レアリティなどは様々かつ膨大で、ほぼ全ての歴代ライダーを網羅する。

—これはガンバライドと初めて出会った一人の少女の運命の出会いの物語である…。

—街のゲームセンターにて、ガンバライドのゲーム筐体の画面に今日も一つの戦いの様子が映し出されていた。

—画面では仮面ライダーBLACKと仮面ライダーゼロノスリアルタイムフォームのチーム、仮面ライダーV3と仮面ライダー龍騎のチームのバトルが、いよいよクライマックスに近づいてきた。

（ふふん、今日も俺が勝つぜ。）

小学生・御剣鋭斗はBLACK&ゼロノスAFチームを巧みに操り、V3&龍騎チームを動かす友人・三枝将騎と熾烈な戦いを展開していた。

「ライドパワー溜まったぜ…そして先攻！行けエツ！ゼロノスッ！」

「うわ！？しまっ…！！」

一バトルを行う度に溜まるパワー『ライドパワー』、これを100%以上を溜め、先攻を取ることで各ライダー達の『必殺技』を発動出来る。

「FULL-CHARGE」

『ハアアアア！！』

『ぐああああ！？』

ゼロノスは専用可変式武器・ゼロガッシャーIIサーベルモードをV3に向け、必殺技『スプリンデッドエンド』で一刀両断…V3の身体に『A』の文字が浮かび上がり、大爆発が起こる、ゼロノス&BLACKチームは見事に勝利した。

「クソー！やるな、鋭斗…はあ…全っ然勝てねえ。」

「まあな♪でもマサも悪くなかったぜ？」

一互いの実力を認め合う鋭斗と将騎…そして周囲で二人の戦いを見ていたギャラリーの小学生達が『ワー！ワー！』と歓声を上げる。

「さあてと…お？オレは『仮面ライダー^{ゼクロス}ZX』か…んで？鋭斗は何が出た？」

一将騎は対戦する前に出たZXのカードを拾い上げ、鋭斗に何のカードが当たったかを尋ねる。

「オレは…な、なんだこれ…？」

一鋭斗は自分の当てたカードを見て絶句した…何故なら…。

一ゲームをプレイする時に戦うライダー達のカード『ヒーローカード』でもなければ、戦いをサポートするための『スペシャルカード』でもない…何の絵も描かれてない『真っ白なカード』だったからだ。

「なんだこのカード！プリントミスか！？何も描かれてねえッ！！」

「…プッ！！なんだそりゃあッ！？明らかにハズレだハズレッ！！うひゃひゃひゃひゃ！！」

「うるせー！チキショウッ！！」

一それを見た次の瞬間、将騎は爆笑した、それと同時に周囲からさっきの賞賛とは対照的なゲラゲラというバカ笑いが出たので鋭斗がムカッときた時だった。

「鋭斗！買い物終わったから帰るわよ？」

「姉ちゃん！？」

—鋭斗の姉であり中学生である御剣可鍛みつるぎ・カレンが学校の制服姿で買い物袋片手に、ガンバライドをやった弟を迎えに来たのだ。

（（…なにイイイイイイ！？鋭斗の姉ちゃんだと！！））

（相変わらずキレーな人だな。）

—周りの小学生達（野郎ばかり…というか野郎しかない）は鋭斗の実姉・可鍛に対して度肝を抜かすほどビックリした…ちなみに、彼らとは対照的に、特に鋭斗と親しい将騎は可鍛を知ってるため至って冷静だった。

「どうも皆さん、うちの弟がお世話になってます。」

「「は…はい！！こちらこそ…！！」」

（オイイイイ！？オレと姉ちゃんに対する態度、明らか違い過ぎるだろ、テメーらアアアアア！あといつオレが世話になった！？）

—御丁寧にお辞儀をする可鍛に対して小学生ギャラリ達も顔を赤らめ鼻の下伸ばしながら全員お辞儀を返す…鋭斗は明らかに下心丸出しなギャラリ共に関心の中で激しくツツコミを入れた。

—金髪ロングヘアー…ではあるが、そこらの頭パーな不良バカが中途半端に染めた様な汚い色ではなく、『混じりっ気無しの純金性』という表現がピッタリな美しい金色。

—おっとりしている様でしっかりした口調での丁寧な言葉遣い、そして成長過程にある中学生らしい身体つき…制服の上からでも解る

くらい、出るとかなり出た。

「はい、ジュース買ってきたわよ、あなたが好きな仮面サ○ダー。」

「あ…ありがと…。」

（（や、優しい…さすが、お姉さん！！鋭斗コノヤロー！！）（

一可錬は鋭斗に仮面サ○ダーを渡す…弟に対する優しさも完璧、目茶苦茶羨ましがる小学生ギャラリ共の中では彼女は女神に昇格され、同時にこんな素晴らしい姉を持つ鋭斗に対して嫉妬…否、殺意を抱いた。

「…御礼ってわけじゃないけど、コレいらないから姉ちゃんにあげるよ…。」

「ありがと…あれ？何も描かれてないわね…。」

一鋭斗は先程引き当てた『白いカード』を出した…何も描かれてないカードを見て不思議そうに首を傾げる可錬、彼女は弟と違ってガンバライドをよく知らない…そのためそういう仕様のカードだと思い、受け取ろうとした、その時だった。

「うふふ…ようやく見つけましたわ♪『白い（ブランク）カード』持ちの『マスター』を♪」

『誰が相手だろうがオレには問題ない…』

「「「!？」」」

「？」

—いきなり彼らの前に現れたのは傘を差す赤いゴスロリ姿の少女…だが可憐以外の全員はゴスロリの隣に立っている『存在』に釘付けになり、驚愕した…。

—腰には『A』のUSBメモリ型アイテムをはめ込んだバイクのハンドルを象ったベルト、Aとフルフェイスメットを象った青いシールド付きの仮面、そしてメカニカルな大型の重剣を携えた真紅の戦士…。

—その名は『仮面ライダーアクセル』：『仮面ライダーW』に登場する風都署刑事・照井竜が『加速の記憶』を持つアクセルメモリを使って変身した姿、だが『架空の存在』である彼が何故ここにいるのか…？

「このワタクシ、カードコレクター・鮮堂アカネのコレクションにピッタリかもしれませんわ♪さあ…!」

『「白いカード」を渡してもらおうか?』

「これは姉ちゃんにあげるんだ!!だ、誰が渡すかよ!!そもそもお前ら何者なんだよ!?!なんでアクセルが…。」

一姉にあげるカードをいきなり『よこせ』と言い出すゴスロリ：鮮堂アカネとアクセルに言われ、鋭斗は反論するが…。

『オレに…質問をするなあーッ!!』

「ヒエッ!？」

「馬鹿な子…アクセルに質問をするようなことを言うから…。」

「鋭斗は迂闊に『質問』をし、アクセルの逆鱗に触れたため、重剣…エンジンブレードで斬りつけられかけたが…。」

「危ない!! えーい!!」

「ね、姉ちゃん!？うがアアアア!!」

「「「ギアアアアア!？」」」

「『えええええ!! な…投げたアッ!？』

「なんと、可鍛が鋭斗を掴みかかり、将騎達ギャラリーの方へ投げたため、間一髪命は助かった…『命』は、可鍛のまさかの行動にアカネとアクセルが驚いた。

「私の弟を傷つけようとするなんて…許しませんよ!？」

『「いはいいや!？傷つけたのはむしろお前だ!」』

「そうですわ!! 責任転嫁もいいところよ!!」

一どこかズレた感じがする可錬に盛大にツツコミを入れるアクセルとアカネ、するとそんなハチャメチャな行動が『奇跡』を呼んだ…。

（やり方は無茶苦茶だけど、危険を省みずに人を助けるなんてすごいな！よし、オレが力を貸してやるよッ！）

「ほえ？なんだろう…今、カードから声が…？」

「まさか！？マスターはボウヤではなく…貴女だったの！？」

—『白いカード』の『声』を聞いた可錬は首を傾げながら不思議そうにしてるのを見てアカネは鋭斗から彼女に視線を移すが遅かった。

（さあ！一緒に戦おう！）

（…解る、今、私がすべきことが…このカードが教えてくれている…！！）

—カードの『情報^{データ}』と可錬の『心』を『一体化^{シンクロ}』させた瞬間…奇跡がその形を表わす。

「なんだ！？ゲーム機が光って…！！」

「PROGRAM—DRIVE」

—ギャラリー達が騒ぎ出すのも無理はない、ゲーム筐体のタイトル画面が切り替わり、眩い光と共にこのような文字が表示されたのだから。

「…チャージ!!」

一可錬はカードをガンバライド筐体のデータを読み込むカードリーダーにセットした後、自然とその言葉を口にし、カードにデータをチャージ、アカネとアクセル達に向かってカードを投げつける。

「ライダー…コール!!」

一そして『白いカード』…否、ガンバライドのカードを実体化させる特殊な才能を持つ者『ライドマスター』の証たる『マスターライダーカード』からライダーが姿を現した…。

『ハアッ!!』

「あれは…まさか!?!」

「ああ…マサ、あれも…『本物』だよな…!!」

一鋭斗と将騎がお互いの頬を抓るが目の前で起きて自分達の前に現れた『者』は夢ではない…。

一スピードとヘラクレスオオカブトムシを意匠に持つ、赤い眼が輝く銀の仮面に鋼の鎧、そしてカードホルダーとカードリーダーが付いた剣を携えた『蒼き切り札の剣士^{エース}』…。

一平成ライダーシリーズ五番目の主人公・剣崎一真や『仮面ライダーディケイド』の『ブレイドの世界』出身の青年・剣立カズマが変身する『仮面ライダーブレイド』がその勇敢な姿を見せた。

「私、まだガンバライドのこと詳しくないけど…よろしくね!ブレ

イドさん!」

『最初はそれでいいのさ! 行こう、可鍛!』

「ええ♪」

一改めて『ブレイド』マスターとなった可鍛は不安な気持ちもあるが、ブレイドの言葉でそれが不思議と和らいだ。

「キイイイ!! あ的女アツ!! やっておしまい! アクセルウウウウ!!」

『言われなくとも…さあ、振り切るぜツ!!』

『やってみな!!』

一アカネの一言で動き出した『A』^{アクセル}を迎え討つべく、『切り札』^{エース}であるブレイドは専用武器・醒剣ブレイラウザーを片手に応戦を開始した。

『ウェツ!!』

『おおおお!!』

一斬撃と斬撃、蹴りと蹴り、パンチとパンチ…甲乙つけがたい戦いを現実世界で繰り広げる、互いに『速属性』である二大ライダー達。

「頑張っ! ブレイドさん!!」

『もちろんさ、ウェイ!!』

『ウェイって何の道だよ…グハッ!?!』

「アクセル!?!」

一応援に應えるかの様にブレイドはアクセルを盛大に殴り飛ばした…しかし、アカネはここで『奥の手』を使ってきた。

「『スペシャルカード』…発動!!」

『ンギヤアアアスッ!!』

『ウェッ!?! ナンデイスカ! アリハ…アッー!』

一なんと、アカネはライダーのサポート効果を持つ『スペシャルカード』を発動…突然、恐竜の頭に手足を生やした奇妙な姿の怪人…ティーレックス・ドーパントが現れ、なんと、ブレイドをかじりはじめたのだ。

「ええええ!?! ブレイドが食べられちゃうー!!」

「その心配はありませんわ…♪ただ…ちょっと、『打たれ弱く』なるだけですから♪」

『ガジ…ガジ…プペェッ!!』

『ウェッ!?! オデノカラダハベダベダダ!!』

一アカネは勝ちを悟った黒い笑みを浮かべ、自分の『仕事』を果たしてサッサと消えたティーレックスによって唾液まみれになったブ

レイドを眺めていた。

『ウリャアアア！！』

『ギャアアア！？』

「ブレイドさん！？」

「アクセルの何の変哲もないタダの回し蹴り一発でブレイドは悲鳴を上げる…。」

「ティーレックス・ドーパントの効果は『1ラウンドの間に防御－200、相手が速属性ならば－300』…攻撃の速さを生かせる『速属性』が完全に仇になり、ブレイドは『防御－300効果』を食らってしまったため防御が薄くなった彼にとっては、アクセルの放つ一撃一撃が大ダメージになってしまうのだ。」

「まだまだ…今の攻撃でライドパワーはMAXよ！アクセル…やってしまいなさい♪」

『覚悟はいいな？オンドウル野郎…ハアアアアアアアア！！』

『ENGINE！MAXIMUM－DRIVE！』

『ウソダンドコドーン！！』

「ライドパワーMAXのアクセルはエンジンブレードを介して、A字型のエネルギーを斬撃波として放つ必殺技『エースラッシャー』でオンドウル…ではなく、ブレイドを斬り捨てた。」

『絶望が…お前のゴールだ!!』

『が、は…!!』

―ブレイドは膝から崩れ落ち、そして俯せに倒れ、地に伏した…。

『フン…他愛もない…。』

「このブレイドもワタクシのコレクションに加えてあげますから安心なさって♪少なくともアナタみたいなド素人よりは上手く使ってあげますから♪」

―倒れたブレイドを見てアカネは黒い笑みをさらに黒くする…彼女の目的は全てのマスターライダーカードの入手、今までも数多くのマスターを葬ってきたアカネは初心者かつ素人な可錬を心底見下す、だがそれが『誤り』であることにまだ気づかない…。

「ブレイドさん…?嫌、嘘…そんな…!!」

―可錬はピクリとも動かないブレイドを見て青ざめるが…彼女は諦めなかった。

「お願い…立って…まだ、まだ諦めないで!!」

「そ…そうだ、諦めんな!立て!立つんだ!ジ〇ー!!」

「立ってくれ!ブレイド!」

「「頑張れー!!ブレイドー!!」」

―可錬に続いて鋭斗や将騎、そしてギャラリー全員が倒れたブレイ

ドを応援する。

「無駄無駄♪どーせ立てるわけが…!？」

『なんだと?』

—アカネがそれを鼻で笑うも次の瞬間…。

『うおおおおおおおおおおお!!』

—ブレイドは咆哮と共に見事、『復活』を遂げた。

「すげえ…『ライダーガッツ』だ…!!」

—『ライダーガッツ』、体力が0になった際、低い確率で発生…ほとんど瀕死状態ではあるが、生き返ることが出来、逆転のチャンスにも繋がるのだ。

『セヤアアアア!!』

『そんなくたばり損ないで今更なに…ぐばあ!？』

「ちょッ…アクセル!？こっちに飛んで来ないで! キャアアアアアア!!」

—見くびったせいか、油断をしたアクセルはブレイドの斬撃で吹っ飛ばされ、アカネもろとも壁に叩きつけられてしまった。

「さあ!ブレイドさん!反撃のチャンスですよ!!」

『ああ!』

ーブレイドはブレイラウザーから三枚のラウズカードを取り出し、カードリーダーにスラッシュした。

[THUNDER]

[KICK]

[MACH]

ーサンダーディアー・キックローカスト・マッハジャガー…三つのラウズカードのビジョンが浮かび上がり、ブレイドの身にその力が宿る。

[LIGHTNING—SONIC]

『ハアアアアアアア…ウエエエエエエエイツ!!』

『ギャアアアアアアアアアア!?!』

「た・わ・ばあああああ!?! 覚えでなざいいいい!! 必ずそのブレイドを手に入れ…!!」

ー超高速のスピードで全力疾走しながら放つ電撃を纏わせた必殺キック『ライトニングソニック』が炸裂、アクセルとアカネは感電しながら壁をブチ抜いて飛んでっしまい、哀れ、二人はお星様になっってしまった。

『ハア…ハア…勝った…! 勝ったよ、可鍛…。』

「よかった…。」

―ブレイドは片膝をついて息を切らしながら、涙目で彼を心配していた可鍛を安心させる様に声をかけた。

『悪い…ちょっと休ませて、また何かあったらいつでもオレを呼んでくれ…それじゃ!』

―そう言いながらブレイドは大の字に寝そべり、ライダーの姿から元のカードに戻ってしまった。

「ありがとう、ブレイドさん。」

―カードを抱きしめながら可鍛はパートナーに御礼を言い、鋭斗と向き合う。

「さあ、帰りましょう、鋭斗♪今日の晩御飯、何がいい?」

「んー…何がいいかなー…。」

(鋭斗の姉ちゃんって、何者なんだろう…?)

―仲良く帰る姉弟の姿を見ながら将騎は可鍛に疑問を抱いたという…。

一夢のカードゲーム『ガンバライド』：『白い（ブランク）カード』を引き当て、ライダーに会えるのは次は君達の番かもしれない。

(後書き)

どうも皆様、作者の柳雨といいます、『LIGHTNING』を読んで頂きましてありがとうございます

ここで少しライドマスターズの用語説明をば、長くて説明になるかどうか不明ですがこんな感じです

マスターライダーカード…『G^{ガンバ}ライド研究所』が仮面ライダーというヒーローをデジタル的に造り出す研究中に偶然生まれた奇跡のカード、普通のガンバライドカードとの違いは何も描かれてない『白い(ブランク)カード』であること、半物質的にライダーという情報^{データ}を封じ込めてあり、特別な才能を持つ者のみがマスターライダーカードにガンバライドで^{リアル}データをチャージすることにより本物の仮面ライダーを現実世界で召喚^{コール}することができる

ライドマスター…特別な才能とマスターライダーカードを持ち、ライダーを実体化させることが出来る者達の総称、様々なライダーのマスター(例…可鍛ならば『ブレイド』マスター)が数多く存在する、ライダーとマスターとのシンクロ率が高ければ高い程ライダーの強さも増してくる

…と、前回のBURNINGや今回のLIGHTNINGではこの二つが重要になっていきます

それではまたどこかでお会いしましょう、柳雨でした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5559m/>

ガンバライドバトル ライドマスターズ ～Ver.LIGHTNING～

2010年10月8日11時45分発行